

大宮八幡宮 笹の輪潜り神事について

『釈日本紀』の「備後風土記」逸文に拠りますと、昔、武塔の神が、備後国に立ち寄られた時、日暮れとなつたので、「将来」と名乗る兄弟の家に一夜の宿を求められました。

先ず、弟の巨旦将来は裕福であつたが宿を貸さず、兄の蘇民将来は貧しい乍らも粟のご飯を炊いて歓待しました。翌朝、礼を述べ「茅の輪を以ちて腰に付けよ」と告げられたといいます。

その後、この村に疫病が蔓延しましたが、茅の輪を付けた兄とその家族は生き残ることが出来たのです。

そうして、武塔の神は、自ら須佐雄の神と名乗り「蘇民将来の子孫」と称する者は、すべてを救うと誓われたのであります。

当宮ではこの故事に神倣い、境内産の笹竹を用いて、「茅の輪」に肖り「笹の輪」を奉製致しました。

因みに「サ」は神々を表し、サクラ（神坐）、サツキ（五月）、サナエ（早苗）、サオトメ（早乙女）等

「蘇民将来の子孫也」と心中で唱え、「疫病退散」「新型コロナ禍熄滅退散」を祈念して、前の方と充分間隔をとり乍ら、左・右・左とこの「笹の輪」を潜つてお回りになり、ご神前へとお進み下さい。

（令和二年五月一日）